

特集 第5回『言語力』大賞コンテスト

書く理由

第5回言語力大賞 大賞受賞 人文学部2年 三浦 元義

まず応募のきっかけとしては、実は私はこの賞の存在を去年の五月頃、入学してかなり早い段階で聞いていた。小説が好きで、ということ先輩に話していたらこの賞のことを紹介されたのである。

という訳で、友人と息を捲いて去年も作品を提出したのであるが、結果は見事に落選。もちろん友人も。私の作品は今読み返せば審査員の方々の目が正しかったのだと納得するしかないのだが、友人は今でも去年自分が落ちたのは俗に言うカテゴリーエラー(賞の傾向に作品の方向性が即していなくて弾かれること)であったのだと信じている。

確かに昨年までの受賞作を読んだ限り、作品の傾向として比較的シリアスな話が多い。去年の友人に限らず、誘ってみた人の何人かには、私はあまり真面目な作品は書けないから、と言って敬遠した人もいた。

告知の方法については、私は入学したての頃から知っていたのでうまく言えないが、この大学で小説を書いている人は今回この賞に投稿した人よりも沢山いることは確かである。その人たちにも作品を投稿してもらえそうな賞になってほしいと思う。

今年の投稿作品に関しては、夏休みの「日本文学演習 A」という太宰治を扱った集中講義で、東郷克美

先生から聞かせて頂いた講義内容がそのまま元ネタになっていたりする。講義中にふと東郷先生が言った、今回の講義のレポートは短編小説の形式にしようか、という言葉に触発されて講義中に考えていたあれこれに、以前遠野に旅行に行った時に語り部の方から聞かせて頂いた物語がくっついてこの様な形になった。

今回、このような過程を経て書いた作品が、賞に選ばれたということは私にとってはとても嬉しいことである。兼ねてより文芸部でもっと本を読んだり書いたりして語り合える人間が増えないものかと思っていたのだが、孤独と思いがちな創作という作業に、ここまでいろんな方が関わっているのだと実感することが出来たのはとても勇気づけられるものがある。

やはり、何かを書くのにはエネルギーがいるし、理由がいる。自分が書きたいから書くのだと黙々と書き続けられる人もいるのだろうが、少なくとも私はそうはなれなかった。その意味で、大学が主催でこのようなコンテストが開かれているというのは学生にとって大いに励みになっていると思う。

最後に、東郷克美先生、先生を大学に招いて下さった方、さらには遠野の駅前で興味深い話を聞かせて下さった語り部の方々にも、ただただ感謝です。

(みうら もとよし)

第5回弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

I : 文学作品部門 (ジャンルは自由)

*応募総数 16点

大賞 人文学部2年 三浦 元義

「幻灯夢」

優秀賞 教育学部4年 民部田 真由子

「四季」

〃 人文学部2年 柳谷 智美

「もしも、ホテルみたいなら」

〃 理工学部4年 水口 元

「写真」

佳作 人文学部4年 山本 浩輔

「落書き」

II : 評論部門 (テーマ「太宰治 ; 一人と作品」) *応募者無し

★受賞作品公開★<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/index.html>

日常性に潜むドラマの発掘を期する

第5回言語力大賞審査委員 弘前医療福祉大学准教授 斎藤 三千政



学生の創作を読むのも、審査するのも、はじめての経験だ。応募作品数16篇を読み終えて、驚いたことがある。学生ゆえに、青春期ゆえに、当方が想定したその創作モチーフは、格差社会の問題、混迷する政治問題、あるいは恋愛の苦悩などに力点が置かれるのではないかと、という予想だった。ところが、案に違い、多くの作品で扱われたテーマは、いうならば「日常性の問題」なのである。もっと具体的にいえば「家族の問題」が、その主流を占めていた、ということだ。

むろん、そのことを不満に思っているわけではない。それどころか、入賞作品を含めた多くの作品が、じつに、みごとに小説世界を構築していることに、むしろ、多大の感銘を受けたのである。

たとえば、審査員の圧倒的な支持を得た、大賞受賞の「幻灯夢」は、小説の構成、場面展開の巧みさ、そして、過去と現在をクロスさせることによって、姉の失踪事件の謎、変容していく主人公の心理状況などを浮かび上がらせる。この手法は、まさに直木賞作家の長部日出雄がいう「人間が、決して後には戻らない時の絶対的な流れによって運ばれながら、意識のなかでは絶えず過去と現在を往復して生きている存在であるからに違いない」ということばを、想起させる。

なによりも、この作品は冒頭からして、まことにストイックな文章で読み手を幻想的な小説世界に誘うのだ。その表現力には、それこそ舌を巻かざるを得ない。作家の河野多恵子が「よい作品の導入部には、その作品の気配の手応えが早くも感じられている」という、その気配が濃厚なのだ。

また、優秀賞の「写真」は、物心がついたころに、なぜか母親が姿を消し、父と子のぎこちない二人暮らし

を余儀なくされるなかで、懸命に希望を見出そうとする高校生の健気な姿を描いていく。

さらに、同賞の「もしも、ホテルみたいなら」では、父親の突然の交通事故の死に遭遇し、現実として受け止めることができない主人公が、不条理というほかない事態に、いうことばを失い、立ちすくんでしまう姿を、巧みに描出していく。二作とも確かに、きわめて深刻な事態の出来をテーマにしている。しかしながら、孤独感に耐えながら、それでも前向きに生きようとする主人公を、静謐なタッチで描く作者の筆さばきは、みごとというほかない。付け加えるならば「写真」の、往復する「坂」の設定、「もしも、ホテルみたいなら」での、ラストの「蛍」の設定が、主人公の心象風景の表出に、抜群の効果を挙げているように思われる。

紙幅が尽きたようだ。応募した学生諸君の日ごろの文字・活字への関心は、強いと見た。来年もぜひ挑戦してほしい。併せて、学生諸君に感謝をしたい。というのは、まことに、個人的な感懐で恐れ入るが、久しく忘却のかなたにあつた次の一節を、思い出すことができたからである。

—日々、なにひとつ新しいものがないかのごとく見える日常性、—だが、そこにも人間の深淵がぼっかり口をあけており、それからしても人間のもろもろの問題を問いかけることができるはずだ、と。悲劇的でも喜劇的でもない日常の中に、だれが、どういうすばらしい劇を掘りあてるか、現代の、それが課題である、と私は考える。……

四十年まえの、作家の高橋和巳のこの「ことば」は、いまもその光彩を、失ってはいない。

(さいとう みちまさ / 弘前ペンクラブ会長)

継承と創造の言語力を

第5回言語力大賞審査委員 人文学部講師 楊 天曦



第5回弘前大学学生『言語力』大賞コンテストは円満のうちに幕を閉じた。

応募作品は、詩作が一篇含まれる他はすべて小説の体裁をもつ作品だった。ファンタジックな表現が多いのは、学生たちがそのようなジャンルに触れることが多い傾向の表れだろう。全体的に、構造が漫画的だったり、表現が映像的だったりする、文章にサブカルチャーの影響が見られる特徴がやや目立った。日本の近代小説に通じるテーマと、言葉の表現への継承性を確認できる作品もあり、そのような一作の「幻灯夢」に大多数の票が集まった。民話を取り入れ、異界の時間と現実の時間を交差させたこの作品に大賞が与えられた。優秀賞に、自然と人間をテーマにした詩作「四季」、命の表現を蛭に託した「もしも、ホタルみたいななら」、風景、空間描写を軸に構成される「写真」が選ばれた。佳作「落書き」にはバーチャルな世界に現実感を滲ませる軽快さがあった。5作品のうち3作品が家族の絆の表現を表現しているところに共通点がある。

語彙が多く、心理描写やディティール表現が巧みな文章から、作者の学生は近代小説を読んでいることがよく分かる。また、サブカルチャー的な表現が多い

が、中にはきらりと光る新しさを見られる作品もあった。継承性と創造性のバランスがとれる言語力の大切さを改めて感じる。

応募作品の16作品すべてがフィクション作品に占められ、当初の企画にあった、「太宰治生誕100周年記念にちなんで、「太宰治一人と作品ー」をテーマとする評論部門への応募がなかった。今回の「言語力大賞コンテスト」の遺憾な点である。評論部門のテーマの範囲が定められる形をとる場合、その専門分野の教員が学生へ呼びかけるという形で意欲を喚起する方法も考えに入れることができたかもしれない。

コンテストに対する応募者からの意見として、「他大学からもうらやましがられる位、面白く良いイベントだと思います」、「もっと盛り上がればいいなと思いました」、「書く機会を得てよい経験になるので、これからも続けていってほしいです」というコメントが寄せられた。書きたい、言葉で表現したい、大学時代にこのようなわくわくする表現活動に参加したいという積極的な姿勢が見られたことがとてもうれしい。これまでの経験と蓄積の上で、今後「言語力大賞コンテスト」がよりバラエティーの富んだイベントに発展することを願う。

(よう てんぎ)

第5回言語力大賞コンテストの審査を終えて

第5回言語力大賞審査委員 理工学研究科講師 根本 直樹



それまで存在しか知らなかった「言語力大賞」の審査委員を依頼された。断ろうとしたが熱心に依頼されたので、「他に引き受け手なく困っているのだろう」と勝手に推量して引き受けた。自分に文学的素養はないと自覚しているので、内容には踏み込まずに、「きちんとした文章で書かれていること」を審査基準とした。普段読んでいる学生諸君のレポートの一部にはかなりひどい文章が見られ、そのような基準で充分に優劣がつくだらうと甘く見ていた。しかし、その目論みは見

事にはずれた。自ら応募するだけのことはあり、しっかりした文章の応募作品が多かった。

以下、審査を終えて感じたこのコンテストに対する要望である。まず、応募者の少なさにはとにかく驚いた。「学生の文字・活字文化に対する関心と理解を促進し、(中略)言語力及びコミュニケーション能力の向上を図る」という本コンテストの目的が達成されているとは到底思えない。PR の努力はされているが、もう一段の工夫をお願いしたい。さらに、PR だけではなく応

募したくなる環境づくりも重要である。審査委員会等でも意見が出たが、読書感想文や書評など、より多くの学生が書きやすい部門の設立を考えて頂きたい。対象とする本を毎年数冊ずつ予め指定すれば、学生にお勧めの本を読んでもらえるし、審査も楽である。受賞作の著作権は図書館に属するのだから、何年か後に受賞作品集を出版してはどうだろうか。どのような作品が受賞したのかという情報は応募する際の参考になるし、「自分の作品が出版物になるかも知れない」ことが応募のモチベーションになるだろう。21世紀教育等に文芸作品執筆のための構想等の仕方を学ぶ講義を設置するのも良いかも知れない。日程も再考し

て頂きたい。審査期間が新学期開始や科研費申請の書類作成の時期に重なり、本学教員の審査委員には大変な負担である。「活字・文化の日」にこだわるなら、むしろこの日を応募締切としてはどうだろうか？応募者は夏休みが終わって最後の一踏ん張りができるし、審査期間も応募数に応じて変更できるだろう。また、現状では選に漏れた作品はどこを改善すれば良いのかフィードバックがない。「言語力」向上を望むならそのフォローも考えて頂きたい。以上思いつくままに書いた。ここで書いたことがどの程度取り入れられるか分からないが、来年度の応募者大幅増をお祈りする。

(ねもと なおき)

特集 新たに指定された貴重資料の解説

「弘前八幡宮古文書」について

附属図書館長 長谷川 成一



本学附属図書館には、「弘前八幡宮古文書」(以下、八幡宮日記と略記)196点が所蔵されています。このたび、新たに貴重資料に指定され、本館の「貴重資料保管室」に保管されることになりました。

本資料は、本学が弘前八幡宮から10万円で購入し、昭和38年(1963)8月27日に、受入れたものです。受入れ後、教育学部に保管されていましたが、昭和55年(1980)ころに附属図書館へ移管し、以来、本館の貴重資料保管棚に収納され閲覧に供されてきました。

内容は、大きくは二つに分かれ、八幡宮の社務日記と風俗文選ですが、大部分を占めるのが、元禄6年(1693)から明治41年(1908)にいたる、215年間の社務日記です。弘前八幡宮の宮司を代々務めた社家頭しやけがしらの小野家が、17世紀末から20世紀初頭まで、途切れることなく記録してきた日記であり、全国的に

見ても類例は少ないと思われます。近世・近代における神道史、宗教史、津軽地方における宗教政策史、藩政史を研究する上で、大変貴重な資料であることは言うまでもありません。具体的には、藩政時代の弘前藩における神職の支配形態、寺社統制、明治維新期の神社側から見た神仏分離と国家神道の実態等を研究する上で不可欠の資料です。加えて軍都弘前のなかで果たした近代の八幡宮の役割など、示唆に富む記事内容から、今後、多くの研究者によって活用されるものと期待しています。

風俗文選は、江戸中期の俳人許六が芭蕉の遺志をついで編んだ最初の俳文選集で、宝永3年(1706)の刊。小野家の蔵書と推定されます。当時の社家たちや弘前の文人の教養等を知る上で、有益なのではないかと思われます。(はせがわ せいいち)



八幡宮日記の中で最も古い
元禄6年(1693)の「万覚帳」



「万覚帳」元禄6年6月2日条。
弘前藩4代藩主の母・久祥院立願の際に下付することになっていた、横内妙見堂など4社への初穂料についての記事